



鴻文会会報

第 11 号
発行・鴻文会

〒753 山口市吉田1677-1
山口大学人文学部内
電話 (0839) 22-6111
(内線) 808
郵便振替口座
下関0-15902

いま、人文学部は

鴻文会名誉会長 山本和之

鴻文会の第一期生が社会に巣立たれてからすでに四十年近くの歳月を重ね、会員の中には勤務先をすでに定年退職された方もいらっしゃると思います。この度、はからずも名誉会長をお引き受けることになり、この伝統ある同窓会の発展に少しでもお役に立てればと願っています。

大学は、十八才人口の激減に伴い、いま冬の時代を迎えようとしています。人文学部でも、社会の変化に対応できるように、入学者の選抜制度や学部の教育・研究体制の改革を鋭意検討中であります。人文学部は、「いま、風はルネッサンス！」というキャッチフレーズをもっていますが、キャッチフレーズのごとく文化のそよ風が吹きわたり、人文学部に対する社会的支持が強まることを望んでいます。

人文学部の就職は依然として好調です。就職先の職種は、以前と比べて教員が減り情報処理などの一般企業が増えています。あらゆる職種に進出しています。今春の人文学部卒業生の七割弱が女性であったわけですから、女性の進出を物語っていると思います。しかし、これも先輩諸氏の活躍があったからこそと感謝しています。

人文学部では、昭和六十三年以来、春に公開講演、秋に公開講座を定期的に開催しています。公開講演は山口県内各地をまわっていますので、その節はぜひお出かけ下さいませようお待ちしています。公開講座は、人文学部の教室を使用して、土曜日の午後計6回の講義を行っています。生涯学習に対する社会の要請が強まる中で、この公開講演・公開講座は市民との知的ふれあいの場として好評を得ています。

平川キャンパスも徐々に変化しています。人文学部の前に国際交流会館が建ち、山大通りの拡張工事が今行われています。完成すると通りの印象もすっかり変わると思っています。会員諸氏もぜひ山大を訪ねて来て下さい。青春時代の自分の姿がまざまざと浮かび上がってくると思います。

「第十三回委員会」報告

一九九一年六月二十二日午後二時から人文学部会議室で、第十三回の鴻文会役員会が行われました。出席者は、役員十二名と学内幹事三名でした。役員会で話し合われた議題を、議事録にもとづいてご紹介いたします。

役員会では、まず、大塚博久会長から前年度の活動報告と今年度の事業計画が紹介されました。この中で、今後会員のみなさまのご検討をいただかなければならない課題が、幾つか提案されました。

第一は、会員名簿の有料化の問題です。会員名簿の作成には、印刷費や郵送費の直接経費だけでも二年度分の会費収入にあたる金額が必要になっています。従来のように無料で配布すると、鴻文会の活動は会員名簿の発行の他には何もできなくなります。鴻文会の活動を広げるためにも、会員名簿は有料としてはいかかか、という提案がありました。しかし、具体的な実施方法については、まだ検討を重ねる必要があります。会員の皆様のご意見をお寄せください。

第二は、鴻南会（旧制山口高等学校同窓会）との共同事業に関するものです。前年度より、鴻南会役員との連絡を密にしてきました。連絡会では、共同事業の計画が一つの話題になっています。両会が親睦を高め、それぞれの活動が活発になる契機としての共同事業を企画したいと考えています。この方も、好い知恵を会員の皆さんからお借りしたいと期待しています。

第三は、『国際交流基金』についてです。山口大学では、山東大学との学術交流を継続していますが、この交流をさらに拡大し、国際交流のための基金を設ける計画もっています。全学で三億円の基金を集める計画ですが、鴻文会にも相應の負担を求められることになりそうです。目下、全学の協議にかかっている段階ですが、まもなく募金計画がとりまとめられる予定です。その折には、鴻文会としての対応を、皆さんにご相談しなければなりません。

どの課題も簡単には結論はできませんが、こうした活動が契機となって、鴻文会のますますの発展をみる事ができるよう、役員一同念じているところです。

私の中の山大・山口

思い起こせば

岩野（旧姓渡辺）訓子
（国文学・文理第十八回卒）

国文の有志で卒業後十年を節目に山口を訪ねている。昨春が二度目の訪問であった。有志というが、本当は全員集まることを期している。十年目は幼な子を抱えており、二十年目は老親の世話や子供の受験期に当たって仲々全員集まれない。子育ては適当に、受験期の子供とも無縁だと思っっている私は皆勤である。

昨春はちょうど花どきで、後河原の花の下、気分だけは二十歳の女たちがそぞろ歩きを楽しんだ。大学は移転しても私たちの中の山大はやはり後河原にあった。私の通学路はおもかげはあったが随分変わった。文学部跡には新しい施設ができていて、あの頃のままだという気がした。テニスコートぐらいのものだ。経済学部の跡地は県の美術館になっているので、経済学部前の御堀のあたりで麦わら帽子をかぶって（いた、と人が言う）絵を描いていた自分の姿とダブってありがたい。亀山の下には昼食の店「クルマ」がちゃんとあって、さだまさし風に言えば、店生の姿は二十年の歳月を物語っていた。（自分たちも二十年の歳月を身にとったトシマなのだが、幸いに自分の姿は自分に見えない。）一緒にコーヒを飲みながら、「気分は今でも二十歳だね」という仲間に、今も昔もみんないい人たちだとしみみ思う。頭部並びに顔面の、目に付くものを取り去れば昭和四十年代の女子大生が復活するはずだが、中味は確実に変貌を遂げていた。夫や子供を大切に、地域と付き合い、年寄り

の不勉強とその日暮らしがたたって、急激に疑問が増えた。研究室の書庫で深呼吸すれば、あの懐かしさも恐ろしい書物の攻撃に緊張する。アカデミズムの香りなどと夢みた当時の気分とはまことに隔たりのある現実の要求で、今は文献を探す。恩師関先生の御教示をいただき、初心をとり戻したのも束の間、文献さえ手に入れればもっと自由になると思っていた安易さに気付く。何しろ、シニアグラスを手離せず、三十二ビットのコンピュータをたたきながら頭は八ビットのままのだから。国語学の論文は自宅でフロッピーディスクを用いて探索できるし、公立図書館の端末で国会図書館の文献を探すこともできるのだが、問題はそれから先である。山大（での勉強）が自分の中で生きているかいないか、考えるのも恐ろしいことである。

（愛知県立豊田高校教諭）



さて、二十一年目に当たる今年の五月、学会出席のため、研究室を訪ねた。長年

私の心の中の山大・

文理・英文科

徳久(旧姓亀山)玲子

(英語学・英米文学・
文理第二十六回卒)

昨年からは、私は、阿東町の山の中の小さな小学校で、一、二年生合わせて六名の複式担任をしている。教員数も少ないため、音楽主任、社会科主任、生活科主任、研修主任を兼ねている。今の仕事は、学生時代に熱中していた英語学や英米文学とは、まったく関係のないことばかりである。ただし、英文タイプを打っていただくおかげで、パソコンを打つのにたいへん役立っているが……。

小学校教員になったころに、職場の同僚から、よく、「なぜ、教育学部の初等科へ行かなかったのですか。文理で、英語を勉強したって、何にも役に立っていないじゃありませんか。」

と、言われたものである。しかし、人からいくらそう言われても、私は、その気持ちには、まったくなれないのである。やはり、文理の英文に行ってきたよかったと、今でも思っている。なぜだろう。

確かに、この十三年間、英語とは、ほとんど無縁の生活をしてきている。しかし、春が来て、庭に黄色いラッパ水仙が咲いたのを見れば、和田敏英先生の英詩の講義で、ワーズワースの Daffodils の詩を読んだ時に想像した情景を今でも思い出す。ヨーロッパの美術展を見に行けば、プロット神父さんの「キリスト教文

学」の講義や、アレキサンダー・ブルース先生の「イギリス社会史」の講義の内容を思い出しながら、その芸術作品の背景を念頭において鑑賞してしまう。そして、教壇で、国語の言語事項を児童に教える時、言葉は、歴史によって、いろいろな使われ方をし、意味が変容してきていることを、いつも心に留めている。まさに、山本和之先生の英語学や、添田建治郎先生の国語学で教わった理論である。文理学部、文学科、英語学英米文学専攻で学んだことは、大きさに聞こえるかもしれないが、今でも、生きる糧となっているのである。

三年前、仕事の都合で、山口大学の教育学部へ行くことがあった。卒業して初めてであった。湯田から大学にかけての通りには、見たこともない建物が立に並び、あの文栄堂の場所さえ変わっていたのには驚いた。そして、門を入ると、自分が自転車通っていた大学とは、どうも違う感じがする。樹木が大きくなったからだろうか。新しい建物が立ったのだろうか。あまりの変容にショックを受け、なつかしの文学部の建物まで行けずに帰ってしまった。今度、行くことがあれば、昔の英文の研究室だった部屋まで行ってみたい。たしか、四階だったと思うが……。

(阿東町立篠目小学校教諭)

人文学部
教官から

アンリ・グイエに
会った日

末松 壽

一九九〇年九月から一年の滞仏中、私がであったり再会した人のうち、パリ在住のアンリ・グイエ氏のことをお話しします。

一月三十日(水)朝、文章のことを考えているとき森川さんより電話あり。今朝十一時にグイエ先生のお宅に行くとのこと(彼は二十数年前、この哲学者の指導のもとにパスカルに関する研究をなされていた。)数日前、この話をきいたとき、よろしければ自分も一緒につれていってほしいと頼んでおいたからだ。

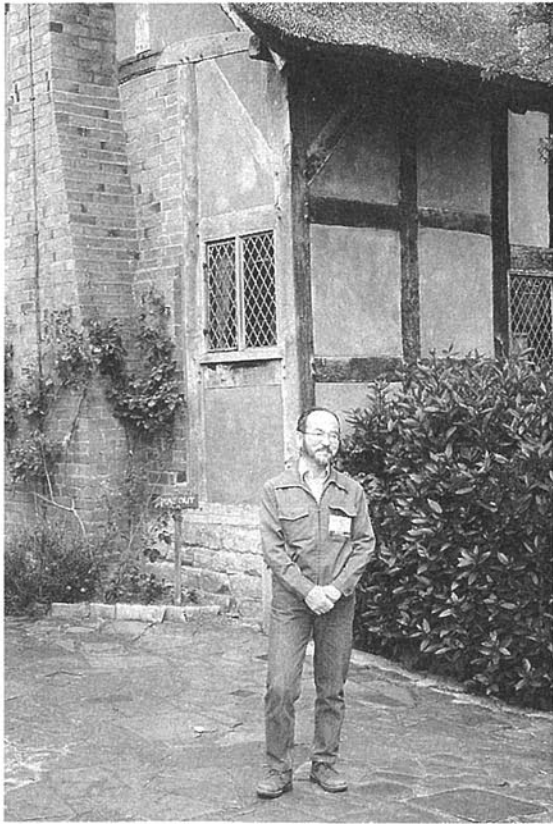
正装。雨。メトロの乗り継ぎ。十六区のエミル・オジェ通りにつく。演劇学者が劇作家通りに住むとは! アパルトマンの入口を確認。建物の上の方が工事中で、頭上には角材の列やトタンなどが張出している。安全を怠って事故を招いた訴訟のことを新聞でよんだ。急いで通りすぎ、カフェで時間をまつ。戦争の話「フィガロ」誌の読者となった森川氏はパスタゴヌやサダミュセンのことによく精通しておられる。自分は質問者。

年月。Henri Couhier は老いた。九十歳。身体が小さくなり、歩行も困難らしい。危ないのもう図書館には行かず

手持ちの資料で仕事をしている、といわれる。だが、大きな目、澄んだ灰色の瞳。知性の言葉は、昔より温和だが(講義と談話の違いもある)、何のてらいもなくただ単純で、実に楽しく刺激的、何とまあ我々に(私にまで)問いかけ意見をのべ、情報を与えてくれたことか。この方にもみえるのは最初で最後かもしれないとおもい、自分には稀なことだが先生の目をしっかりと見つけてはなすようにつとめる。

森川氏による紹介。彼の仕事「田舎人への手紙」とパスカルを中心にしたジャンセニスト達とイエズス会士達との争いの思想研究。彼はヴァティカン図書館から入手したイエズス会の年次報告に現われるこの事件についての(もちろんラテラン語での)記載を論文で使ったという。まさに発掘。彼の今後の予定「論文は完成し、三月には大阪大学で審査をうけるという」についてのやりとり。ジャン・メナール氏の話もでる。

自分にも『何をしている』ときかれる。セリエ氏のゼミに触発されて書き始めた文章、悲劇をめぐる考え方の二極分裂(文学/演劇)のことをちらりと話す。グイエ氏は驚いて『面白い!』、といわれる。嬉しかった。『何を讀んだか』との問いに、アリストテレス、ドビニヤック、アルトールをあげ、ラシーヌを論文の対象にしたい旨のべる。彼は「エステル」序文の「驚くべき」一文を口ずさみ、パティ、クレイグ、コポーラの仕事を名指した。二十年前に自分がサンシエ分校(現パリ第三大)の演劇学科で先生の『詩学』註解に出席したことをうちあける。



Stratford upon Avonにて

氏は、あれはベルナルド・ドルトからの要請だったこと、当時劇評を書いていた自分には美にためになったと述懐された。パティの書名は思い出せない、後に知らせようといわれるので、名前、住所、電話番号を書いてわたし。

ギトン氏にはほとんど毎木曜日に会われるらしい。もちろんアカデミーの会合でだ。そういえば、このかつてのソルボンの同僚で、いままた共に「不死の人」については「彼の哲学の歴史ではなく歴史の哲学だ」と少し残念そうに（と自分にはみえた）評価された。哲學家グイエの発言。コンピュータで「書く」習慣が入って何が失われるかといったことも話題にでた。正午ちかく退出。

帰りはアンリ・マルタン駅から乗ってサン・ミシエルにむかう。昔はなかった線。二階だて急行。寛やみづぼはがいたら

喜んだらうに！グイエ先生は、五時のランデ・ヴーを示唆されたのに、私の午後の受講（ルイ・マランのゼミ）があるので午前にもしてもらった、と森川氏。

数日たって、氏のまさに「二回性の諸芸術（素描）」という東京で出た論文（そういえばあの時、『ササキの』を知っているか」とも訊ねられた）の抜刷と、アカデミー・フランセーズという文字の印刷された封書が届いた。その短い手書きの文字（みみず！）の判読の難しさ。文面の一節はこうだった。「私がこの論文を素描した文集は演劇にかかわるものです。筆蹟……年のせいで……をお許しください。」

（フランス語学・フランス文学教授）

感想

頼住光子

山口大学文学部に赴任して六ヶ月がたちましたが、いまだに「先生」とよばれると照れくさい感じがします。ついこの間までは学生だったので、そうよばれることに慣れていないということも、一因ではあるのですが、考えてみますに、もっと大きな理由があるようです。

といいますのは、学生と一緒にゼミをしておりますと、よく「結局、正解は何なのですか」という意味のことを聞かれます。クイズではないのですから、テキストの究極的な意味を、一義的にこれだと決定することは、そのテキストが豊かなものであればあるほど不可能に近いのではないかと思えます。だから「正解はわかりません」。たとえ一日の長があ

るとしても、わからないという点では五十歩百歩だと思い、学生から「先生」とよばれるたびに、落ちつかない気分を味わっている今日このごろです。

（日本思想史学講師）



いま山大・山口は

社会学・社会心理学

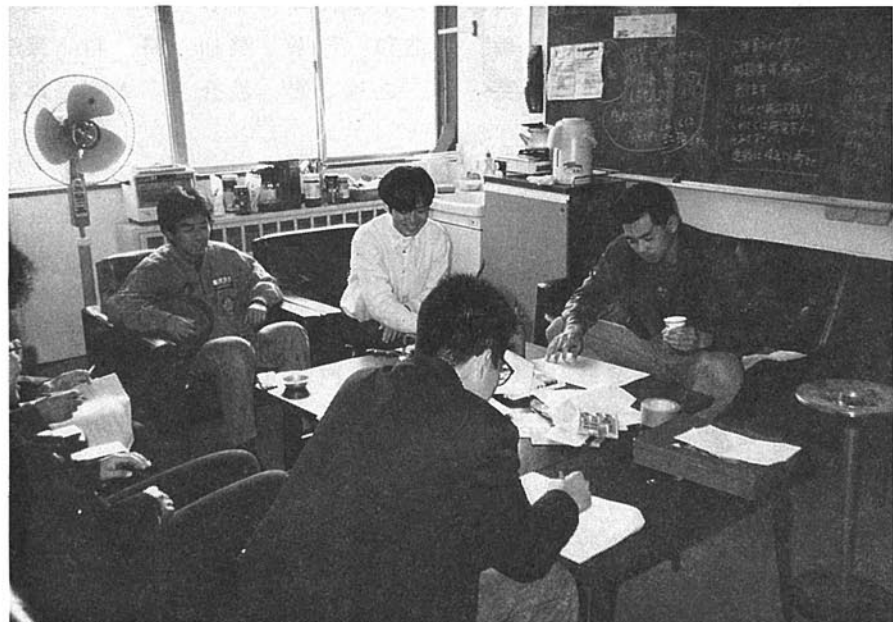
研究室便り

いま、社会学の研究室は、私が教授を務め、小谷典子氏が助教授を務めております。私は農村、家族、地域などを研究対象としており、小谷助教授は都市、階層、社会移動などの研究をしております。人文学部発足以降、新たに設置された社会学心理学講座を含め、社会学、社会心理学の二つの講座を社会学系と称して提携した運営を行なっています。社会心理学には、象徴的相互作用論のほか多面的な活躍をされている小川全夫教授、エスニシティ関連の研究をされている日系アメリカ人のカシマ・テツデン助教授がおります。社会学系の卒業生は、鴻文会とは別に、「山口大学社会学同窓会」を作って親睦を深めております。東京、関西、広島、福岡には支部組織もできています。年一回の総会のほか、支部での会も開かれます。東京支部は、毎年、銀座のバーを借りて開催しています。卒業生は各界で活躍しておりますから、私どもは四年生が就職活動をはじめめる時期になると、同窓の卒業生に連絡をとらせて助言を得させたりもしています。

厚生省人口問題研究所所長、NHK解説委員などをはじめとして、卒業生は、行政、ジャーナリズム、民間企業、学校などで幅広い活躍をしています。山口県庁の同窓生が集まりをもつことがあります。

すが、すでに二十数名に達しております。人文学部の一講座としては、異例の多さで頼もしい限りです。研究者になった卒業生も多く、国公立大合わせて九名(女性一名)に達しています。

昭和六十一年、同窓会の協力を得て山口大学で日本社会学会大会を開催したのを契機として、山口大学の社会学は全国的によく知られるようになりました。このこともあって、集中講義には、例年、日本の社会学を代表するような著名な先生方が、きわめて好意的に出講して来て下さいます。学生にとっては、まことに好都合なことと言えます。社会心理学を含め社会学系は学生の志望の多いところであり、二講座合わせて一学年の学生数は二十四名前後に達しています。大郡市の有名私大にいく学生とはタイプが違っているように思います。が、おおむね、真面目で着実な学生ばかりです。才気ばしったところはありませんが、私自身は、むしろ、そのような学生に好感をもっております。



(木下謙治教授)

社会人類学

文理学部の改組で産み出された社会人類学は、今年で十年の年を迎えました。改組時の社会学教授であった山本陽三先生の壮大な計画とご努力のもとに、社会学を充実発展させて社会学・社会心理学

と並ぶ三講座体制が出来上がりました。山本陽三教授が社会人類学の教授に就かれ、社会学・地域研究のセンターとしての機構を組織するはずでした。しかし、山本陽三教授はその計画が完成する前に、昭和五十三年に癌で亡くなられました。初代の教授に就かれた鈴木満男先生は、東アジアの比較研究に尽くされ、社会人類学の一つの方向を与えられました。鈴木満男教授は平成二年の三月に退官され、九州女子大学に迎えられました。あとを就いで、真実(山本)真弓先生が講師として就任されました。

現在の教官の構成は、佐々木衛が助教授、山本真弓講師の二人です。山本真弓先生は南アジアの専門家で、雑誌に鋭い論評を発表されています。また、昨春秋に娘さんを出産されて、研究と家事に身を粉にして奮闘されています。佐々木は、中国の社会と文化の研究にたずさわっています。

毎年十人前後の学生が進級してきます。現在は、大学院生二人、学部生四十人の世帯です。卒業生は、昭和五十八年に最初の卒業生を送りだして以来、今年三月で五十三名になりました。

研究室では『山口人類学年報』を出しています。目下、第六号を準備中です。まもなく皆さんのお手元に届く予定です。これからの研究室の発展に、皆さんのご援助をいただけるようお願いを致します。

(佐々木 衛助教授)

人文学部教官紹介

学部長(併)	山本和之
教授	武宮正男
助教授	松本正男
倫理学	遠藤勝三
中国哲学	高澤智次
中国思想史	高澤智次
日本思想史	高澤智次
美学・美術史	石原達二
国史学	奥津誠二
東洋史学	田中誠二
西洋史学	滝野正憲
考古学	山口房司
社会学	近藤喬一
社会学	中村友博
社会学	小谷典子

社会学	小川全夫
社会心理学	カシマ・テツデン
社会人類学	佐々木真弓
講義	真実
国語学	関田建治郎
国文学	水本精一
中国語学	柴田勝二
中国文学	入谷仙介
中国文学	阿部泰二
英語学	山本和之
英米文学	岩部浩三
外国人教師	アレクサンダー・ブルース
ドイツ語学・ドイツ文学	田中敏彦
フランス語学・フランス文学	下崎正利
言語学	井上三朗
埋蔵文化財資料館	河村吉行

山口大学 人文学部 公開講演

第四回公開講演

の中には年号をもつものが少数あり、そのなかには、卑弥呼が魏の首都洛陽へ使いを派遣した時期と一致するものがある。三角縁神獣鏡をめぐる話をできるだけ分かり易く話してみたい。

平成三年度山口大学人文学部公開講座

テーマ 「西洋文学への誘い」

期間 平成三年十月五日(十一月十六日)までの毎週土曜日(六回シリーズ)

ところ 山口大学人文学部

講師及び講義概要

① 田中 晋助教授 一回(十月五日)及び二回(十月十二日)の講義を担当

② 井上三朗助教授 三回(十月十九日)及び四回(十月二十六日)の講義を担当

③ 小粥 良講師(教養部)五回(十一月九日)及び六回(十一月十六日)の講義を担当

「世紀末の文学―夢と現実―」

オーストリアの文豪ホーフマンスタールの初期の作品を中心に、世紀末の耽美主義とそれに対する問題意識の狭間で揺れ動く作家の姿を追う。

「卑弥呼の鏡」

人文学部 近藤喬一教授

「三国志」は中国の正史の一つと評価されている。その中に那馬台国の女王卑弥呼の話が出ている。魏の皇帝が下賜した銅鏡百枚の記録もある。三角縁神獣鏡と呼ばれる鏡がそれではないかと考えられる。これらの鏡

の常識を覆してみたい。

「秋藩からみた近世初期の幕藩関係」

人文学部 田中誠二助教授

萩藩初期政治史を、將軍と大名がどのような関係を持ち、その関係を通して、將軍が藩の中にいかに根を下していったかという視角から問題としたい。萩藩には四つの支藩があったが、本藩と支藩の関係も、実は將軍を介してきまっていた。本支藩関係も幕藩関係だったと言えよう。これらの話を土台に、萩藩についてのこれまでのいくつかの「常識」を覆してみたい。

「歴史と考古」

平成三年六月十五日(土)

ところ サンライフ萩

「秋藩からみた近世初期の幕藩関係」

人文学部 田中誠二助教授

萩藩初期政治史を、將軍と大名がどのような関係を持ち、その関係を通して、將軍が藩の中にいかに根を下していったかという視角から問題としたい。萩藩には四つの支藩があったが、本藩と支藩の関係も、実は將軍を介してきまっていた。本支藩関係も幕藩関係だったと言えよう。これらの話を土台に、萩藩についてのこれまでのいくつかの「常識」を覆してみたい。

一九九〇年度

人文学部卒業生・
大学院修了生進路状況

人文学部

人文学科

哲学・倫理学

伊藤ハム(株)、(株)佐賀銀行、国立国会図書館

中国哲学

山口大学大学院人文科学研究科、山口県警

日本思想史学

山口県庁(臨時採用)、大原簿記専門学校、福岡トヨベツト(株)、小郡商事(株)、西中国キャタピラー三菱建機販売(株)、日本タイムシエア(株)

美学・美術史

北九州市立美術館、NHK(広島放送局)、(株)フルベール化粧品、(株)三貴、(株)広島そごう、大日本印刷(株)、川崎重工業(株)

国史学

明治製菓(株)、日本ナレッジインダストリ(株)、(株)インテック、日立システムエンジニアリング(株)、(株)イズミ、(株)CSK、秀功社印刷(株)、近畿日本ツーリスト(株)、山口県教員(高校)、山口県教員(中学校) 東洋史学

日立電子サービス(株)、ANA(全日空)(株)、アイビー化粧品(株)、小郡町役場、大和不動産鑑定(株)、鹿児島県教員(高校)、江崎グリコ(株)、福岡県教員(臨時採用)、(株)富士通大分ソフトウェアラボラトリ

西洋史学

大玉製紙(株)、三浦工業(株)、四国ゼロックス(株)、(株)技工団、東洋証券(株)(下関支店)、エフコープ生活協同組合、(株)ナフコ、日本通運(株)(九州支店) 日立INSソフトウェア(株)、(株)西友

考古学

聴講生(山口大学人文学部)、(株)ユニード、明寶織維(株)、佐伯町役場、奈良国立文化財研究所、福岡市役所

社会学

ナチュラル・グループ、農林水産省、(株)ブルーグラス、シーイーシー(株)、労働省、(株)日本総合研究所、日本電信電話(株)サンゲツ

社会心理学

天満屋(株)、安川情報システム(株)、情報技術開発(株)、ミニストップ(株)、北九州市役所、(株)システム開発、山口県庁、(株)神栄情報管理開発センター、山口中央生活協同組合、中国通商産業局、東京出版販売(株)

社会人類学

(株)ヒロケイ、富士通山口システムエンジニアリング(株)、(株)三和銀行、キリンビール(株)、(株)清和、九州ジャスコ(株)、近畿日本ツーリスト(株)、日本電気(株)、ハイマックスシステムズ、富士通ゼネラル(株)

語学文学科

国語学

(株)アイビー化粧品、国税専門官、(株)ユース、島根県教員(高校)、(株)ダイエイ、(株)教育文化社、山口県教員(臨時採用)(ニチマン)、広島大学大学院

国文学

(株)第一学習社、(株)経済法令研究会、住信情報サービス(株)、私立新庄高校教員(臨時採用)、尾道市役所、山口県教員(中学校)、(株)原家具、(株)親和銀行、生活協同組合ひろしま、宇部協立病院、航空自衛隊一般幹部候補生、大分県教員(臨時採用)、(株)INTERNATIONAL LABORATORY CORPORATION

中国語学・中国文学

八幡証券(株)、(株)シーイーシー、(株)ナムコ、ユニード、防府市役所、大分県庁、私立明星学園高等学校(臨時採用)、山口県庁、九州日本電気ソフトウェア(株)、日通工販(株)

英語学

青山商事(株)、山口大学大学院教育学研究科、山口県教員(高校)、長崎県立諫早高等学校教員、島根県教員(臨時採用)、アシックス(株)、鹿児島県教員(高校)、(株)日本交通公社、日通航空(株)、そごう(株)

英米文学

ロイヤル(株)、(株)第一学習社、福岡教育大学大学院、岩国市役所、日本生命保険(株)(九州営業局第2グループ)、宇部興産(株)、防府養護学校教員(高等部)、

(株)毎日コミュニケーションズ、(株)ライフ(宇部営業所)

ドイツ語学・ドイツ文学
山口県教員(高校)、サンデー山口、中津市役所、(株)大昌、日立電子サービス(株)、(株)宇部情報システム
フランス語学・フランス文学
(株)モニ

言語学

(株)につかつ、太宰府市役所、(株)福岡シティ銀行、(株)アイネス、(株)長府製作所、(株)広島銀行、研究生(山口大学人文学部)、山口市役所、大日本印刷(株)、岡山県教員(臨時採用)

大学院人文科学研究科

地域文化専攻

光華女子学園、福岡県糸島郡前原町教育委員会、田原本町教育委員会、大分合同新聞社、山口県庁

言語文化専攻

山口銀行、藤井寺短期大学

会費未納の方のみ振替用紙を同封致しております、なにとぞお納め下さいませようお願いします。繰越金は減る一方で名簿発行も危ぶまれます。窮状をご賢察下さい。
終身会費 五、〇〇〇円
郵便振替口座
下関〇一五九〇二
加入者名 鴻文会

鴻文会第十三回役員会

平成3年6月22日

平成2年度事業報告

平成2年6月1日 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会
 6月9日 第12回役員会
 12月20日 「鴻文会会報第10号」発行
 平成3年2月8日 鴻南会との連絡会

平成2年度収支決算書

収入の部

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
繰越金	5,316,050 円	5,316,050 円	0 円	前年度より繰越金
会費収入	1,150,000	279,940	△ 870,060	前年度会計の中に970,000円 すでに計上(250人分)
雑収入	200,000	180,843	△ 19,157	証券、預金利子
合計	6,666,050	5,776,833	△ 889,217	

支出の部

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
会議費	100,000 円	103,502 円	3,502 円	役員会車代ほか、 鴻南会との打ち合せ会
印刷費	200,000	176,748	△ 23,252	会報印刷費(3,400部)
郵送費	228,000	173,322	△ 54,678	葉書購入、会報郵送料(157,678円) 通信連絡費
寄付金	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
謝金	90,000	57,737	△ 32,263	会報発送宛名書きアルバイト (17,737円) 幹事謝金(30,000円) 事務手伝い謝金(10,000円)
事務費	20,000	7,547	△ 12,453	フィルム代、現像・プリント代、 電報代
予備費	5,928,050	0		
次年度へ繰越金		5,157,977		
合計	6,666,050	5,776,833		

平成3年6月22日 監査の結果過誤なく適確に経理されていることを確認します。

監事 竹内通弘 印
芳西靖幸 印

同窓会だより

・国語学・国文学
 一九九一年二月三日大学前の「双葉寿司」にて開催。毎年欠かさず開かれているが、出席者の少ないのが難点。今年も研究室の教官五名全員参加で、総員一六名。正、副会長の小田穂亮、嬉一夫氏を先頭に湯田で二次会も持たれた。
 ・英語学・英米文学
 一九九一年八月十七日
 おかめ茶屋(かめ福内)
 文理・人文三期会 十七名
 九州、関西からの参加者、子供連れもあり、卒業以来の再会もあり、互いに久闊を叙した。
 ・日本思想史学
 主任教授・山田洗氏は、三月に退官、共立女子大学国際文化学部教授に就任なさいました。それを記念する同窓会が、中城龍彦・原口公康両氏の奔走によって、一九九一年二月十日、湯田の山泉荘で開催されました。当日は春一番が吹く生憎の荒天でしたが、卒業生三十八名(一〇九期生全員の半数以上)、在学生二十五名が集まりました。東は千葉の伊藤伸二氏、川崎の福田由紀子氏、西は老岐の山口賢治氏、四国からは松田(旧姓原)千恵子氏、といった方々が遠路を厭わず参集なさいました。他に、出席の意志がありながら体調を崩して来られなくなった方が二名、湾岸戦争のために出席を取消した方が二名。「祝電」があり、また八六年度卒業生一同から花束が届けられました。多くの方々のスピーチを聞きまししたが、在学中と変わらぬその調子に、皆さ

平成3年度事業計画(案)

1. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会(5月24日)
2. 第13回役員会
3. 「鴻文会会報第11号」発行
4. 鴻南会との共同事業
5. 事務の近代化
6. その他

平成3年度予算(案)

収入の部

科目	3年度予算額	2年度予算額	比較増減	摘要
繰越金	5,157,977円	5,316,050円	△158,073円	
会費収入	1,000,000	1,150,000	△150,000	5,000円×200人分
雑収入	200,000	200,000	0	証券、預金利子
合計	6,357,977	6,666,050	△308,073	

支出の部

科目	3年度予算額	2年度予算額	比較増減	摘要
会議費	200,000円	100,000円	100,000円	役員会、鴻南会との共同事業準備
印刷費	200,000	200,000	0	会報印刷費(3,600部)
郵送費	250,000	228,000	22,000	葉書購入、会報郵送料 通信連絡費
寄付金費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
謝金費	100,000	90,000	10,000	会報発送宛名書きアルバイト 幹事謝金 事務手伝い謝金
事務費	20,000	20,000	0	フィルム代、現像・プリント代
予備費	5,487,977	5,928,050	△340,073	
合計	6,357,977	6,666,050	△308,073	

んとともに哄笑いたしました。最後に、突然、山田先生の胴上げとなり、はらはらしましたが、無事、先生の小柄な身体が空に舞いました。その後の二次会には山田先生も参加なさったようです。かくも盛会となるうとは、幹事の方もわたくしも、予想いたしませんでした。

さて、四月には頼住光子氏が講師として着任なさいました。頼住さんはお茶大の出身で、人文学部旧教官高島元洋氏の学生です。現在、在学生三八名(女子十九名、その他十九名)という盛況。当地の住み心地がよいのでしょうか、諸君、なかなか卒業しようとしません。伝統がないことを「伝統」として誇る当研究室が、それでも十二年間にわたって培われてきた山田思想史学の「伝統」を、一体いかに揚棄して、発展(衰退?)の道をたどるかは、頼住さんの新風と、これからの在学生諸君の志にかかっている、と言ってよいのではないのでしょうか。

・美学・美術史
一九九一年四月二十八日
円山志ぐれ(京都市) 約二十名
主として六十年以降卒業生を対象としたOB会。旧交をあたため、盛会だった。

・西洋史
一九九一年十一月二十三日
いこい絵本山 三十名程度
OB生と在学生がこの上なく和やかに、語らった。

・社会学・社会心理学
一九九一年六月十五日
博多シティホテル 三十五名
社会学同窓会の生みの親でもある故山本陽三先生の十三回忌を迎える今年は、福岡の地で同窓会を開催しました。

	昭59	昭60	昭61	昭62	昭63	平元	平2	平3	計
人文学科		1	7	21 (5)	103 (57)	131 (62)	104 (59)	108 (57)	475 (240)
語学文学科	1	2	2	7 (3)	83 (65)	97 (79)	98 (78)	84 (68)	374 (293)
研究科						1	7 (3)	3 (1)	11 (4)
聴講生								2 (1)	2 (1)
研究生							2 (1)	4 (2)	6 (3)
計	1	3	9	28 (8)	186 (122)	229 (141)	211 (141)	201 (129)	868 (541)

一九九〇年度
人文学部在籍学生数

(一九九〇年十月一日現在)

山口点描



拵じみた暖簾をくぐって足を踏み入れる。山崎光枝さんはおでん屋「一八」のおばさんである。学生時代にはその名前までは知らなかった。ふっくらとした温和な表情は、あの頃とちっとも変わりが無い。下掲の写真を参照のこと。

「一八」の開店は昭和三十年代半ば。店の命名の由来は、御主人の名「一明」の一字をとり店の末広りの繁栄を願ったものとのこと。

「一茶」も「蛇の目」も廃業して、「大阪屋」と「万両」は健在。いずれにしても懐かしい名である。

開店当初の頃は山口大学生のたまり場のような場所だったという。おじさんが元気だった頃は、よく十二時過ぎても明りがついていて、閉めようとして戸を叩く声にせがまれて……。心当りの御尽もおられよう。

なじみの顔ぶれがよく議論していた。学生と会社員、県庁マン。教官も加わって、時の過ぎるのも忘れて社会の「行く末」を論じていた。生活費がなくなるとアルバイトと称して「一八」で働かせてもらっていた学生がいた。食べさせてもらっていたようなものである。

おじさんが亡くなられて三年。「初盆にはなじみの顔が集まって、花火を上げて供養してくれました」としみじみおばさんが言う。つれあいと一緒に三十年は長かったようで短くもあつたと言う。お二人の娘さんも成人されていまは孫も。みな「一八」から始まりましたとも。

この一年もまた歴史的に大きく揺れ動いた年でした。湾岸の戦争はまた、可能性ある若い命が「お国のための」大義名分のもと数多く散り、ソビエト連邦の崩壊と、まさに激動の一年でした。

* 編集後記 *

山口市もサビエル聖堂の焼失、金竜館のとりこわしと、皆さまの思い出多い建造物が姿を消しました。編集子にとっても、山入入学時、母親に「あれが大学の時計台」と誤って紹介したいわくつきのサビエル教会の鐘でしたが、実にあっけない別れとなりました。

「一日も早い再建を」と願うものです。大学前の大通りも、本号の徳久さんのおっしゃるように変容し、最近また拡幅工事が始まって、一段と様変わりしてきました。徳光商店のおばさんもお元気。二年前にお会いした私に忘れずに声をかけてくださいました。(K・S)

